

衛藤宗学の輪郭

山内舜雄

この研究会は、関係者の努力によりまして、毎回盛会が続くのですが、今日のような盛会はめづらしいかと存じます。

これ、ひとえに総長先生のお話しが聴きたくて、皆さん参ったと思いますので、私の方は、ほんの前座だけにさせて頂きます。

衛藤宗学の、ほんのアウトラインを語るにとどめたいと思います。じつは、「仏教教学より見た衛藤宗学」という論題を、いただいておりますが、文字どおり、その周辺をなでる程度に致します。

お手もとに、略歴が配られてありますように、お亡くなりになったのは、昭和三十五年の十月、すでに二・三年まえ十七回忌を、お墓のある豪徳寺で営んでおりますから、早や二十年の歳月が過ぎ去ろうとしています。

本日、お集りの皆さんの中で、直きに声咳に接した方は、

衛藤宗学の輪郭（山内）

すくなくなりつつあるわけで御座います。

そんなわけで、たいへんよい時機により企画を、係の方で持たれましたので、総長先生、鏡島先生の両巨頭が御出席になりました。肝心のところはお二人に願って、私はいわば露払いの範囲で申し上げるのでございます。先生は、曹洞宗大学林を卒業後、京都大学にまなばれ、さらにヨーロッパへと留学されました。大正十年から十三年までのほぼ三年間で、第一次大戦後の円の強い時で、留学生生活は殊にドイツでは最高だったと語られていました。

洞門の生んだ、二人の優れたインド哲学者、木村泰賢、宇井伯寿の両先生がヨーロッパに留学なされたのと同後するわけで、当時の学界の趨勢をお察し頂ければと存じます。

すこし話は戻りますが、大正元年の京都大学卒業というのは、戦前の日本思想界を風靡した西田哲学の胎動期ではなかったかと思われまます。あとから、やはり京都大学にまなばれ

た鏡島先生、それより衛藤先生の哲学的方面の衣鉢を継がれた岡本総長先生から、この辺の消息を、よくお伝え頂ければ幸いです。

京都から東帰した先生は、本学に奉職されたわけですが、京都の安泰寺も董されていました。紫竹林学堂が御座いまして、有名な丘宗潭老師によって開かれ、岸沢樵安、沢木興道の両老師が宗風を挙揚されたところでございます。

先生の宗学を語る時、やはり紫竹林学堂をぬきにするにはできぬと思われます。先生が駒沢の地で、宗門学徒の育成に心血を注がれた道憲寮は、この京都の紫竹林学堂の分寮でございます。昭和十年の開寮で、私どもはこの道憲寮で育てられたのですが、ずっと先輩の鏡島先生や酒井得元先生は、紫竹林学堂で学ばれたわけでございます。

あとは経歴の示すとおり、昭和十三年に文学部長、未だ文学部の中に、仏教、東洋、人文の三学科があった当時のことです。戦後、総長になられたのが二十八年、亡くなられたのが前に申し上げましたように三十五年であります。

× × ×

さて、著作の方ですが、ライフ・ワークとも云うべきものは、やはり『宗祖としての道元禅師』（昭和十九年岩波書店）ではないかと思えます。これは京大へ提出した学位論文でもあります。

この辺の経緯については、私ども戦地に行っておって知りませんので、総長先生から詳しいお話を頂ければと思います。戦後は、いわば戦前の業績の集成期とも云うべきで、『正法眼蔵序説』を始め、多くの宗学上の主張がまとめられ、著書・論文となって現われるに到りました。

が、先生は仏教学者として、その前半生を送られたわけですから、当然、仏教学関係の業績が一方にあるわけでございます。その主要なものを挙げると、古くは『唯識論綱要』、或いは『大乘起信論講義』、後者は、今日でもまだ使われているようであります。私も、随分と使わせて頂きましたが、何分講義ノートを直したものですから重複や冗長なところがあり、それらを省いてスッキリさせると更によいものとなる、と常々思っています。手をつけていません。『義記』を単に真如縁起を以て解釈せず、如来蔵縁起を以て取扱わうとする註釈態度が見られること御承知のとおりであります。

それから『華嚴経』の国訳、『撰大乘論』のような論書も国訳されています。

そこで、仏教学の方面から、これら著述をみて参りますと、衛藤先生は、その蔵書が没後、本学の図書館に寄贈され衛藤文庫となって遺っておりますが、今それを見ると、天台に関するもの、華嚴・唯識に関するもの、特に真言密教に関するものが非常に多いのが眼につきます。仏教学の中では、真言

学をその中心としていたのではないか、と思われまゝ。『密教概論』もあるのですが、これは今秋、門下生の手で発刊されることになっていきます。私は、密教の講義はついに聴きませんでしたが、天台学や『大乘起信論義記』の講義は聴きました。八宗兼学という言葉が仏教界にあります、先生は、密教はじめ天台・華嚴・唯識と主要な教学をほとんど藁籠中のものとなされていたようです。

密教については、近世密教学の泰斗といわれた権田雷斧僧正から、直かに聴きになったようで、マンツーマンで承けられたといわれます。外国留学をすまされ、本学の教授になられてからのことらしい。もちろん、密教学の宗学研究の上から必要であることを見とらされて、かく学ばれたのでしようが、そう云えば、面山禅師をはじめ宗学の巨匠には密教に通じた方が多い。この辺の微妙なところを、のちほど鏡島先生からお話し頂けたらと思います。私に、及ばずながら、宗学と密教との関係を追究した、二三の論攷がありますが、それはこの辺の影響から来るのでございます。

手広く、仏教教学をやられた、というだけなら、他に人がないわけではありませんが、先生は、一方では当時としては大変あたらしいヨーロッパの宗教学をマスターされました。ドイツ留学当時、あちらでは丁度その勃興期であったらしく、ハイラーとか、トレルチの名まえが、よく戦前の講義には出

て来たものです。先生の学問のベースに、近代宗教学があったことは、その学風に近代性をあたえる結果になったと思われまゝ。

先生の講演は、いつも「文化と宗教」から始まりました。今なら、さしずめ「社会と宗教」となるのでしようが、宗教は幅広い文化の中に位置づけられ、そこから説き起されねばならない。文化といっても当時は社会科学の発達は未だなく、ごく狭い人文科学の分野のことなのですが、それでも当時はかなり斬新な説であつたらしい。

先生の宗教学・宗教哲学の方面を發展させたのが、外ならぬ、これからお話しを頂く総長先生でございます。ちょっとでも触れて頂ければ幸甚です。

さて、以上雑然と述べてきた衛藤宗学の特徴を一言でいうと、近代宗教学をベースにしつつ、一方では仏教教学の大筋である真言・華嚴・天台・さらに唯識等の基礎学まで研究し、これらの上に、禅学そして宗学を建設していったことになりました。「宗学は四十を越してからやれ(五十からでしたか?)、それまでは基礎の教学をやれ。」とは先生の口ぐせでしたが、私などは、真に受けて天台をやり、いまだに他国を彷徨している次第です。むづかしいものであります。

昭和の初期に「仏教の宗教学的研究方法について」(『日本仏教学会年報』)という有名な論文を書かれました。これは新し

い宗教的方法を以て仏教を研究しなければならぬことを主張したものと、高く評価されたものです。そして、それは宗学そのものの研究方法論としても一貫してくるわけであり、衛藤宗学の本質を見極めるには、この辺までの掘り下げが必要かと思えます。衛藤宗学が、なぜ近代宗学と呼ばれ得るのか、その根源をさぐって頂きたいと思えます。宗学の近代性の獲得には、並々ならぬ苦心を払われたわけですから。

先生の、仏教概論は、「組織仏教」と呼ばれました。これは、おそらくドイツ等で、キリスト教の組織神学に触れられ、そこからヒントを得て、つくられたと思うのですけれども、戦前に駒沢にまなんだ人たちは皆聴いた有名な講義でした。「組織仏教」のノートが遺族から先般供されましたので、これも近く公刊になると思えます。なつかしい講義にふれることができるわけであり、

先程申しましたように、大正の末期、昭和の初期と申しますと、ともに洞門出身であられた木村泰賢・宇井伯寿の両巨匠が、仏教学界・インド学界のリーダー的な地位にあったことは歴史にあきらかなところであり、

では、衛藤先生と、これら両先生との関係交流はと申しますと、これははるか後輩の私など言及すべきことがらではないかも知れませんが、洩れ承るところによると、木村先生と

は、ことのほか親しかったらしい。畏友と申しましょるか、学風も似ていたようですが、木村先生の重要な著書の序文を先生が書いていたという記憶がございます。この点は、総長先生、水野先生という当時を知る両先生がご健在ですので、お差しつかえない範囲で結構ですから、どうか後進の為に話して頂きたいと思えます。たいへん興味のあるところですから――。

× × × × ×

さて、今日は、時間もあまりございませんので、結論を急がせて頂きます。こう云うふうに宗学から仏教へと、広い基盤の上に組み立てられてゆく宗学は、たいへん客観主義的な、合理主義的な宗学ができると考えられます。客観的学問として宗学を成立させることを目的としているわけであり、

しかも、それを先生おひとり、手作りでやられたところに、この時代の特徴があったと思われて興味深いものがあります。今日のような共同研究とか共同作業のない時代であります。学問というものは、やはり個人を中心として、一個の人間の中で完成されなければならぬ。かのゲーテが理想的人間像とされた時代を想起して頂きたいのです。

なんでも独りで、しかも手作りでやらなければならぬ。下は宗学から、上は宗学まで――。一個の人間が、これ

らを積み上げて完成した稀有のすがたを、われわれは衛藤宗学にみるのであります。

繰り返しましたように、近代宗教学を踏まえた近代仏教学研究の路線にのった衛藤宗学は、当然のことながら客観主義的な合理主義的な性格を持っているわけですが、反面、非常に信仰的な情熱的な面があるのでございます。これは、ちょっと矛盾しているように始めての方には奇異にも思われましようが、じじつでありますので、この点も総長先生、鏡島先生から、じっくりとご説明いただきたいところであります。紫竹林学堂を董されたことを見落すことはできぬ、と始めに申したのは、この意味からであります。

伝統宗学の本拠である紫竹林を承継しながら、先生の思想信仰には、近代的人間としての情熱があり、それが合理的な客観的な近代宗学と程よい調和を奏して、かぎりない魅力を醸し出しているのです。

そうでなければ、あれほど熱狂的に、当時の学生たちが、先生の講義を聴くはずがない、と思われまます。宗学というものは、やはり信仰と学問とが、一個の人間の中にミックスされ、ひとつの完成態を作り出していないと、魅力はないんですね。

この点は、まことに微妙なところでございまして、いわば、衛藤宗学の真髓ともいべきものですから、「衛藤宗学は、

パトスとロゴスから成っている。」と曾つて云われた鏡島先生のご説明を、今日はじっくり聴きたいところでございます。総長先生からは、じかにパトスとロゴスに触れられた体験そのものをお聴きしたいと思ひます。

もう一つお聞きしたいことがございます。それは、昭和十五年から十八年にかけて、かなり永い間、岩波本の『正法眼蔵』の校訂に従事されました。先生のすぐれた業績の一つにかぞえられています。しかし、思想面・信仰面にすぐれていた先生にとって、ああいう文献的検尋は、はたして先生の性に合っていたかどうか。文献考証に費された、かけがえない歳月を惜しむかの如き詠嘆が印象にのこっているだけに、この点についても、総長先生から、しかと明確な御指摘を承りたいと存じます。

このことは、衛藤宗学の性格を明らかにする上で、大事なことでありますから――。

それにしても、衛藤宗学の本流とも云うべき、鏡島先生の学風が、綿密精緻な歴史的考証を特徴とするのは、そもそもいかなる意味なのでしょう。それは、衛藤宗学の補完をこころざしたものなのか。それとも鏡島先生ご自身の意図せる宗学への研究態度なのか。

いづれは、「鏡島宗学とその周辺」と題する研究会が持たれる日がくるわけでありまます。その意味からも、今日、ちょ

つとでも触れて下されば倅いに存じます。

× × × ×

今回は、総長先生と鏡島先生、そして私の三人で、この催しの発表がなされるわけですが、おそらくこれは、戦前、すなわち昭和前期に、衛藤先生の教えをうけた者を、いちおうまとめられたとも考えられます。

もと成りはもちろん、総長先生。四十年に近い御関係にある。うら成りは、かく申す私でありまして、本日は、どうか「もと成り」の、うら成りとはかくも違うか、という本当のところを聞いて頂きたいと思うのでございます。

鏡島先生は、その間にありまして、おそらく衛藤先生が一番期待された、また見事にそれに応えられた宗学の業績をあげられておられるのは周知のところ、多言を要しませんが、衛藤先生を語るとき忘れては申し訳ない方に、三年まえ亡くなられた小川弘貫先生がおられます。

総長先生とは、兄弟みたいなご関係にあり、おふたりで衛藤先生を囲んでいる図は、まこと一仏両祖の趣が致したのですが、総長先生に先立って逝かれたのは、かえすがえすも残念でなりません。おそらく存命して、本日の催しに遭えば、いかに腰の重い小川先生といえども、喜んで出席され、総長先生と並んで、あの温顔に在りし日の恩師を想い浮べつつ、語り継がれたらうと思われつつも、痛惜の念に駆

かれるのは私ひとりではないと存じます。

しかし、衛藤先生の唯識方面を發展させられた小川先生の門から、鎌田茂雄先生が出られました。この人から戦後派になります。鎌田先生は唯識から華嚴へと進み、本学出身者としては最初の、学士院賞を受けられました。衛藤門下のひとり、われわれは数えています。衛藤宗学の「その周辺」のひろがりを示す好例といえましょう。今ではすっかり東大の人になってしまいましたが――。本日お見えのようであります――。

今回で、戦前派三人の話は、いちおう終るわけですが、どうか鎌田先生などを中心に、学内からは、鈴木格禅先生、河村孝道先生、黒丸寛之先生、皆川広義先生、峯岸孝哉先生、または太田久紀・納富常天先生の学外の方も集まって、戦後を中心に、こういう会を持たれたらと思うのであります。

そこで、戦後のことは、そちらにお譲りして、もっぱら戦前を中心に申上げたのですが、前座の性格上、多少雑駁の感があるのはお許し頂きたいと存じます。

さいごに、若い聴講者のために、「衛藤宗学とは何か？」の、すぐれた生きたサンプルを紹介して、私の責をふせぎたいと思います。

それは、鏡島先生の、若き日の労作に「道元禅師における師の位置」という論文があります。そう長いものではありません

せんが、大方のひとは、ご存知と思いますが、私の一番好きな論文でありまして、おそらく鏡島先生の「処女作」と申しますか、三十代前後にお書きになったものと思われまます。

非常に好きな論文でありまして、自分が原稿を書くことに関係なく、損得ぬきで折にふれて読み返してはおるのです。どうして、そうなのか、だんだんその意味が分ってきたんです。それは、この論文が、あの衛藤宗学の特徴を、こよなく表わしているからなんです。

先生のおっしゃる、パトスとロゴスとが、見事に調和されて、衛藤宗学の真髓をそこに見る想いがするのでございます。青年期にみられる求道的なひたむきな思索態度が、清純な筆致に支えられて、さらに好感を呼ぶのかもしれませんが。これからも繰り返し、読むのじゃあないかと思えます。このことは、質度の高い論文なれば、ただ一編でもものせれば、それでよいことを物語っているようでもあります。

若い方々の勉学のために、ひと言さいごに申添えまして、私の話を了ります。